

不規則抗体スクリーニング検査における  
酵素法について

○仁田亜以乃 長谷川浩子 田口茉莉奈 國井祐美 山  
本浩子 伊藤道博 井関徹  
(千葉大学医学部附属病院 輸血・細胞療法部)

**【目的】**2014年12月に改訂された“赤血球型検査  
(赤血球系検査)ガイドライン”では、“酵素法のみで検  
出される抗体の臨床的意義は低い”とされている。  
当院では、不規則抗体スクリーニング(Scr)にカラム凝集法  
による、ケム法(AHG法)、酵素法(Fic法)の  
2法を併用している。今回、我々は、Fic法で検出  
される抗体について検討したので報告する。

**【方法】**当院にて2015年3月16日～10月31日に  
Scrを実施し、Fic法(+)を示した検体を対象とし、  
AHG法、PEG-IgG法での反応性についても検討した。  
なお、検査を複数回実施した患者については陽性と  
なった初回の検査結果を用いた。

**【結果】**1:実患者数6351名、のべ11,372件であつた。  
2:Fic法(+)は138例(2.2%)、内訳はFic法(+)AHG  
法(+):35例、Fic法(+)AHG法(-):103例であつた。  
3:Fic法(+)138例の抗体種別としては、Rh系39例  
(28.3%)、Lewis系27例(19.6%)、非特異反応36例  
(26.1%)、自己抗体25例(18.1%)、その他複合抗  
体等が11例(8.0%)であつた。4:Rh系抗体が検出  
された39例中AHG法(-)は17例、(+)は22例であつた。  
5:上記4.で示したAHG法(-)となつた17例中  
13例はPEG-IgG法(+)であつた。6:非特異反応、も  
しくは自己抗体とされたFic法(+)は61症例であり、  
AHG法(+)は3例、またPEG-IgG法を39例に実施し  
たが(+)は9例であつた。

**【考察】**非特異反応、自己抗体と同定された検体で  
はFic法のみが(+)となる症例が多く含まれていた。  
しかし、同様にFic法のみが(+)を示したRh系抗体  
13例では、臨床的意義を有す抗体と考えるべき、AHG  
法(-)、PEG-IgG法(+)の反応性を示した。当院にお  
いてはAHG法とFic法を併用すべきと考える。

(043-226-2479)